



患者さんがポジティブな気持ちになれる 明るい療養環境とトイレを整備。



採光が行き届く、明るい個室。8角形のトイレ・シャワーユニット(表紙参照)は、あまり奥行きを取らないので、ユニットの前方に1,580mmもの通路を確保することができた。

イムス三芳総合病院は、患者さんが前向きな気持ちで病魔に打ち勝つことのできる快適な急性期医療施設を整備したいという強い思いから、2013年3月、さらに最新の医療機器を充実させた病院へと新築移転しました。24時間対応できる救急医療体制による地域に密着した医療を提供。採光を十分に確保した明るい療養環境は、病院の暗いイメージを払拭し、「愛し愛されるIMS(イムス)」の姿を、より力強く、より頼もしく実現しています。

病院の空間で大切なのは、玄関とトイレ。 トイレの快適さが、看護や医療の質に直結。

移転においては、できるだけ多くのスタッフの意見が反映できるようなプロジェクトチームを設け、患者様引越しチーム、内覧会チーム、動線チーム、災害対策チームの4つが根幹となって、全員参加型の環境づくりが進められました。

新しい病院では、救急外来からすぐにレントゲン室へ行けるなど、速やかな処置のできる動線を確保。病棟では、旧病院では6人部屋などが多かった環境を、個室および4床室としています。

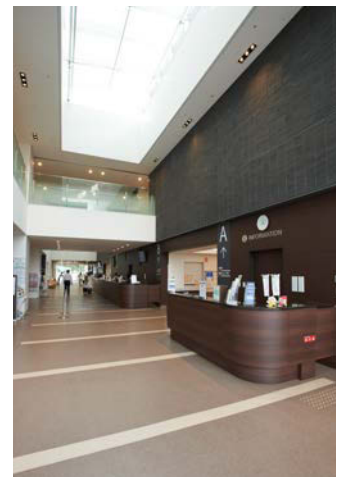
そして、重視したのがトイレの空間です。「どんな患者さんでも、受付と会計とトイレには、絶対に寄られます。エントランスとトイレが、病院の顔。そこを大切にしている病院は、きちっとしていると感じてもらえます。トイレのきれいさ、使いやすさが、看護や医療の質につながると思います(看護部長・竹内由美さん)」。



低層の1Fが外来部門で、2層吹き抜けの明るい日差しが入り込む空間となっている。

【イムス三芳総合病院】

- 竣工年月 / 2013年2月
- 所在地 / 埼玉県入間郡三芳町藤久保974-3
- 施主 / 医療法人社団 明芳会
- 設計 / 株式会社現代建築研究所
- 病床数 / 238 床
- 延床面積 / 14,161.45m²
- 構造規模 / 鉄筋コンクリート9階建て



1Fのホスピタルモール。吹き抜けから自然光が降り注ぐ、まるでホテルのロビーのような明るい空間となっている。カウンターなどには、安全性に配慮して不燃材を用いている。

安心と充実の医療のため、感染対策を重視。 自動水栓を採用し、非接触を徹底。

感染対策のために、水はねが少なくてしっかり洗える深型のスタップ用手洗器を、手洗いの頻度の高いナースステーション入口とハイケア*の場所に設置。処置室には、水はねが少なく、腰を曲げずに使えて負担のかかりにくい、さらには汚れの付きにくいトルネード洗浄による汚物流しを備えています。これらの手洗器、汚物流し、そして処置室の流しの水栓などは自動水栓とし、非接触による感染対策を徹底。充実した設備を積極的に使ってもらえるように、チェックや指導も行われています。*ハイケア(High Care Unit):ICU(集中治療室)と一般病棟の中間に位置する病棟で、ICU から移されてきた患者を対象とした高度治療室。



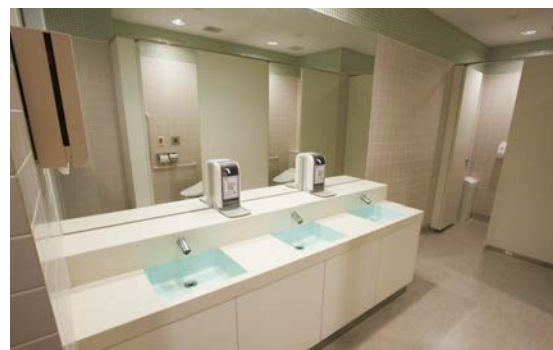
ナースステーション入口に設けられた、水はねに配慮し清潔さを保つスタップ用手洗器。



整形外科にある処置室には、汚物流しを設備。右側は、患者さんの足を洗える脚洗器。



病棟個室にある8角形のトイレ・シャワーユニット。壁掛け便器で清掃のしやすい、清潔さを保てる空間となっている。便器にはシャワーノズルが付いて、尿器などを洗うのにも便利である。



1F外来のトイレ。グリーンガラススタイルには貝殻模様が施されるなど、誰もが使うトイレには、心地よい空間が用意されている。



1Fの多目的トイレ。壁掛け便器はコンパクトで、広さを確保できるフラッシュバルブ式。巻上巾木などで清掃しやすい。



各階に設けられたラウンジ。フロアごとに、白ともう一色のチェアの色を変えるなど、さりげなくデザインされている。



1F平面図
1Fは救急と一般外来の動線が交わらない、効率的なレイアウトを採用。救急センターには前面道路からダイレクトに救急搬送でき、放射線科との連携についても配慮されている。

Voice 病院スタッフの方々からの声

ベッドを迅速に移動できるトイレブースですね。



イムス三芳総合病院
事務長 竹田淳司さん(右)
看護部長 竹内由美さん(中)
総務課 課長 永倉英樹さん(左)

個室に設けた8角形のトイレブースは、角がないので、部屋の中まで入り込まなくても患者さんの顔を見られるのがいいですね。患者さんの出入りもしやすく、シャワーまで備えた空間としては、かなり広くて使いやすいです。点滴スタンドと

ともにベッドを出し入れする時もスムーズに移動できます。お見舞いの方に、ご自分の家のように自慢される患者さんもありました。

Voice 設計担当の方からの声

トイレの機能はもちろん、意匠性も考慮しました。



株式会社現代建築研究所
執行役員 設計部長
服部完志さん(左)
設計部 技師・一級建築士
佐久間雄一郎さん(右)

今後新たに許可病床が増える際にも対応できる、効率的で可変性のあるゾーニングや動線にしています。いかにも病院らしい真っ白な空間にせず、患者さんがなるべくリラックスできるホテルライクな環境づくりを心がけました。院長先生が泌尿器科の先生でトイレへの思いが強く、機能はもちろん意匠性も頑張ってもらいたいと声をかけられましたね。